

オーガスタチンの まなざし



主 教 小 林 尚 明

『Thy Kingdom come(み国が来ますように)』は、昇天日から聖霊降臨日にかけて行われる、世界的な祈りの運動に付けられたタイトルです。この運動は、二〇一六年にイギリス国教会に向けて発せられたカナタベリ―大主教とヨーク大主教の呼びかけによって始められ、世界的な運動に成長しています。

『み国が来ますように』を祈るすべての人々がイエスとの交わりを深め、イエスの証人となるための自信を新たにし、他の人をイエスのもとに導くことを目的とします。

この運動のことを今年二月にカナタベリ―大聖堂に新任主教研修で訪れた時に勧められました。

日本に帰ってから、六月の主教会で報告しますと、「それでは小林主教さんが担当になってください」ということで、神戸教区のポール・トルハースト司祭や大

阪教区のウイルソン・ウォレン司祭などに相談しながら、なんとか形にして、十月の主教会に提案しますと、来年の同時期に日本聖公会として、この運動に参加することになりました。

「具体的導入」

お祈りの期間は、来年の昇天日(五月三十一日)から聖霊降臨日(五月三十一日)までの十一日間です。A六版十四頁くらいのお祈りが配られます。発行部数を大斎克己献金袋の数くらいと決めましたから、十分皆さんのお手元に届くと思います。

具体的には、このしおりの中に、この運動の説明とクリスチャンに導きたい家族、友人、知人五名を選びます。その五人のために十日間祈っていくわけですから、ウイルソン司祭に報告しますと「英語版は?」と問われ、慌てて矢萩総主事に相談しますと「OK」とのことでした。楽しみです。

『み国が来ますように』と祈ることで、私たちは全員、国々の、そしてそれぞれのコミュニティの再生への祈りの一部を担うことになるのです」とジャステイン・ウエルビー・カナタベリ―大主教が述べられています。

(神戸教区主教)

第二回 神戸教区 神学塾主催信徒セミナー

二〇一九年十月十九日(土)、京都教区の黒田裕司祭(ウイリアムス神学館館長)による今年度第二回目の神戸教区神学塾主催信徒セミナーが開講されました。前回に続く連続講話として、「信徒の奉仕職」の、いま、そして、これからというテーマで学びの時を過ごしました。

教会における多様な 展開と協働的な働き

今回のセミナーには塾長の小林主教を含め二十一名が参加、前回のふりかえりから講話が始まりました。教会宣教の活性化をもたらすのは、信徒の奉仕職の「多様な展開」と教会における「協働的な働き」であること、新しい信徒を単に獲得し、増やすことではなく、福音を伝えることが重要であるが、そのための多様性に富んだ展開、働きが必要ではないか、ということを確認しました。

セミナーの内容

セミナーの流れは、一)前回のふりかえり、二)前回のふりかえりの補遺として、「職務における『信徒と聖職』の関係」

現行祈祷書及び一九八八年パス会議決議から、「『信徒奉事者』の歴史と変遷」その任務の視点から」について学び、三)ワークシヨップ「信徒の奉仕職」の可能性を探る「キワード」としての「当事者研究」を通して、前回の講話に関するアンケート等を用いつつ、教会の奉仕の「当事者」として、それに伴う喜び、悩み、展望について分かち合いを行いました。



ワークシヨップでは分かち合いの道しるべとして、宣教の五指標①神のよき知らせの宣言、②新しい信徒を教え、洗礼を授け、養うこと、③愛の奉仕により、人々の必要への応答、④社会の不正に対する構造改革、あらゆる暴力への反対、平和と和解を追求、⑤被造物の本来の姿の回

復、地球の生命を維持・再生への努力(一九八八年パス会議・第八回ACC「全聖公会中央協議会」一九九〇年/ウエルズより)と教会の五要素①ケリユゲマ:み言葉の傾聴、伝達、②ディアコニア:世界、社会の必要への応答、③マルトウリア:日常生活での福音の具現化、証、④レイトルギア:祈り、礼拝、⑤コイノニア:主にある交わり、共同体性(二〇一二年日本聖公会宣教協議会「宣教と牧会の十年提言」より)が示され、これらを意識しつつ意見交換を行いました。

ひとりひとりの 存在が必要

「信徒の奉仕職」というものに焦点があてられた学びですが、聖職も信徒の中から召されたことを通して与えられた奉仕職であり、働きや務めの内容はそれぞれ固有のものがありつつも、ひとりひとりの存在、支えが今一度必要であるということを感じ起す場であったように感じます。誰が、どの教会が、どのグループが優れているかではなく、それぞれが持つ賜物を受容し合い、活かされる場を創り出すことが大切であることを改めて感じた次第であります。

(司祭 和広)
神学塾運営委員